

下)に五種の正行に皆一心ありと言い、「第十一 三心具足文事」(『浄全』十、一六一頁上)には五種正行と言うときは五種の行にそれぞれ三心があり、助正二業に分けるときは念仏の三心をもって助業の三心とせよと言うなど、常に安心起行の相対とともに一向専修と三心を相対させている。

究極的には、『西宗要』「第三 一向専修事」(『浄全』十、一四一頁下)にあるように善導の意は一向専修に衆生を帰せしめるために時に正助二行と二つに分け、時に三心を立てたと言う。また『授手印』(『昭和新訂三卷書』授菩薩戒儀』三八頁)にあるように三心も四修も皆ことごとく念仏に帰すと言い、法然上人との問答に「三心具するにも南無阿弥陀仏」『法全』七三七頁)と言う。ここには、念仏を一つの行という見方を超えて、本願の念仏としての信が大きく強調されるのである。そしてまた、行を信じることによって人間の本来の姿、凡夫性や散心を解決しようとした法然の言う選擇という思想が良く現れているのである。

●第三節 隆寛の安心論

第一項 安心と三心

隆寛はその著作を通して、安心起行作業という往生浄土の要件について明確にその言葉を

踏襲していない。平井正戒氏の指摘（『隆寛律師の安心論』・『専修学報』六、昭和十四年）にあるように、例えば安心論を発心、起行を作業と言ひ換えていることが『極楽浄土宗義』の

凡此三種願各依^レ発心^ニ依^テ作業^ヲ弁^ス定^ス其機^ヲ当知^ニ心行各別^ト其機有殊^ニ故也

（『隆寛律師全集』
以下『隆全』一、八四頁）

との文からうかがわれる。ここでなぜ隆寛が善導・法然の言う安心起行作業の行体系を踏襲していないのかを検討する必要がある。それはすなわち本論では安心の内容として、ある心の持ちようを言っているのか、違う心の状態を言っているのかを検討することになる。

隆寛は法然七十二歳のとき、五十七歳という高齢で『選擇集』を付属され入室したことが『明義進行集』より知られている（田村円澄『日本仏教思想史研究 浄土教篇』平楽寺書店、一九五九年、二八頁）。法然門下となる以前は清岡隆文氏（『隆寛教学の考察—三心釈を中心として—』・『真宗研究会紀要』十、昭和五十三年）によれば天台を学び特に恵心流の影響が強いとされる。高齢にもかかわらず隆寛は法然に入室し、その後法難を受けたり、『顕撰擇』を著し、定照の『彈撰擇』に反論するなど、法然門下でも重要な位置にあったのである。

法然門下入室後の思想は『具三心義』に見られるように曇鸞の他力思想を強く受けた独自の思想となっていることも、すでに清岡氏の指摘するとおりである。

この点について私釈を挾めば、隆寛は天台宗の自力の念仏に失望し、浄土思想に帰入した

のちはむしろ天台宗の念仏を浄土宗義と比較することによって決別しようとしたと考えられる。この根拠についてはあとに述べることとして、このように隆寛の意識として天台を代表とした聖道門しょうどうもんの念仏と浄土門の念仏をその心の持ち方の違いを明確にしようとしたとすれば、それはすなわち安心の違いを明確にすることにほかならない。そこでまず、その安心の内容は何かということから検討を進めたい。

『散善義問答』に上品の三生は三福業さんぷくごふの差別によって上中下品の区別があるのであって、念仏の機は九品の撰するところではないのではないかと問に対して、

散善行者さんぜんぎやう中発三心ちゆうはつさんしん「移念いねん仏行ぶつぎやう」可生本願土かしょうほんがんど之機有之のきあり「為此人ためこのひと」立第三第四二門也たつだいさんだいよんにもん也なり經
云回向発願願生彼国うんきやうはつがんがんせいはいこく 是其証そのしやう 下八品例之げはつしんれいのち 可知也かち

(隆全二、二三頁)

と答えている。これは散善の行者がいて、その人が三心を起こし、念仏の行に移入するならば往生することができ、この人のために三心は九品に通じているのであり、その証拠が『観經』の「回向発願願生彼国」であると云うのである。

つまり、三福の修行を回向して往生しようと願っているのであり、ここには往生の正因は正しく三心であり諸善を回向することが大事であることが述べられている。この意から往生の正因としての心構え、すなわち安心が『観經』の三心であると隆寛は考えていると見て差し支

えないであろう。

ここで興味深いのは、法然は『選擇集』において「念仏行者必可具足三心之文」として念仏の行者を前提としているのに対し、ここでは散善の行者が三心を起こして念仏に帰するとしているところである。このことは法然の選擇本願の念仏と異なった信の取り方を暗示する。

隆寛が安心起行と言う概念を持っていたかどうかは表面上明確ではないが、往生の正因を『観経』の三心と考えていたことは間違いない。そこで次にその三心について隆寛がどう考えていたのかを整理してみたい。

第二項 菩提心と三心

隆寛の往生の正因としての心は『観経』の三心であることは、その著作を通じて明らかである。また、その著作のほとんどで三心に対する見解を示すほど、三心をその教学の中心問題として捉えている。しかし、その三心の見方については隆寛独自の理論も多く含まれているのである。その最も特徴的な言葉が「他力の三心」であろう。その詳細についてはあとで論じるとして、まず最初に往生の正因として持つべき心を菩提心と相対して述べているのでまとめてみたい。

菩提心についての隆寛の見解は『極楽浄土宗義』に往生極楽人は菩提心を起こすべきかと